いずみ 特集号
1993年8月

第15集 私の戦争体験

子どもたちの明るい未来のために語り継ぎます。

届かなかった電報

―母と兄を憶う―

美原東支部　光斎重治

「コンヤオオサカエキヲトオルアイタシ、マサタロウ」。一九四五年二月の寒い朝、玄関の戸を開けようとしたとき、三和土（たたき）の上に落ちていた一通の電報である。

五十年も昔のことで、電文はよく覚えていないが、おおよそこのような内容であったと思う。これがその年の四月十二日、海軍特別攻撃隊員として、「桜花」という人間爆弾を操縦し、南西諸島で戦死した次兄政太郎の母に宛てた最後の通信であった。

皮肉にも、前日の夕刻私と母が銭湯に行った留守に配達され、戸の隙間にでも挟んであったものが、当日気付かず翌朝になって発見されたものである。現在のように電話などが十分普及しておらず、電報が唯一の速い通信手段であった。たとえその日確実に配達されていたとしても、当時の交通事情では、はたして大阪駅で無事会えたかどうかは分からないが、母はこのことを死ぬまで気にしていた。

三月十三日の夜、大阪は大空襲を受け私と同期の小学生の多くが、翌日の卒業式を待たずに死んでいった。郊外で被災を免れた私は、無事中学校に入学したが、五月に新聞で兄の戦死を知ることになった。それは兄等の特別攻撃隊がアメリカの艦隊に突入したことを報じるものであった。母は既に覚悟していたものとみえ、一滴の涙も流さなかったが、年少の私には母の本当の心を知るよしもなかった。

八月十五日は快晴で暑い日であった。天皇の放送があるからと校庭に集合させられ、いわゆる玉音を聞かされたが、雑音がひどく抑揚も特徴があって、何のことか分からなかった。終って教頭から、「聴かれたとおりである、諸君は軽はずみな行動をとらないように」という訓示があって、初めて敗戦を悟った。中学一年生の身では別に悔しい気持ちも沸かず、これで家も焼かれなくてすむと思い、学校の帰り道に古本屋に立ち寄ったことを、なぜか今でも鮮明に覚えている。

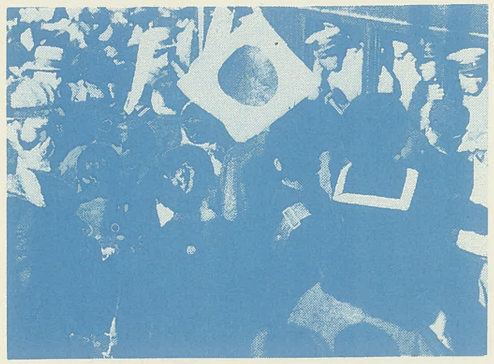
米軍が占領軍として進駐し、日本軍も武装を解除されて、外地からの復員兵がぼつぼつ見られるようになった十月、今度は長兄千代之助の戦死広報が届いた。これにはさすがに気丈な母もガックリ来たようであった。次兄の時は前年に面会もし、特攻隊への編入も聞かされていて、ある程度の覚悟はしていたが、長兄は陸軍で、樺太（サハリン）か北海道に駐屯していたはずであり、やがて復員してくるだろうと期待していた矢先であった。

母は当時の男の子を持つ母親として、子供が兵隊に取られるのは致し方がないと思っていたかもしれないが、決して「軍国の母」ではなかった。次兄が軍隊に入る日、母と一緒に天王寺駅まで兄を見送ったが、同じように入隊する兵隊の父親が、我子に向って「死んでこいよ！」と叫んでいるのを見て、母は「あんなことまで言わなくても」と怒っていた。丁度日露戦争の頃に高等小学校を卒えた母が、与謝野晶子の歌を知っていたかどうかは分からないが、心では「君死にたまふことなかれ」と願っていたに違いない。早くに連れ合いを亡くし、折角一人前にまで育てた子等を「お国のために」と兵隊にとられ、挙げ句の果てに命までとられて、帰ってきたのは白布に包まれた木箱の中の一枚の紙切れだけであった。

残された我々母子は、戦後の混乱期を懸命に生きた。朝四時に起きて伊勢まで甘藷や木炭の買い出しに出掛けたり、近所の人に連れられて、遠く北陸まで魚を運びに行ったこともあった。お蔭で母は足を痛め、二度に渡って両膝の間接を手術し、それが遠因となって最後は五年間寝たきりとなり、一九七五年三月に八十六才で他界した。

母の一生を思うとき、戦前の日本の母親の多くが、同じような体験をしてきたかもしれないが、戦争がなければ、成長した多くの子や孫や家族に囲まれて幸せな余生を送ったはずの女性が、誤った指導者が起こした戦争によって、その幸せを奪いさられたのである。娘や孫には同じことを繰り返させたくないとの思いが強く私の胸に迫ってくる。

「生命を生み育てる母親は、子供の命を守ります」。戦後母親の集会で唱えられたスローガンであるが、最近の平和に慣れた日本では色褪せ顧みられなくなっている。しかし、



写真で見る❶
15年戦争と戦後

1931年　出征兵士を見送る家族。

9月18日満州事変勃発。奉天郊外の柳条湖の満州鉄道爆破を口実に関東軍が軍事行動。ここに15年戦争がはじまりました。

世界のそこかしこでキナ臭いにおいが立ち込め、日本が五十年前とは違った形でこれに関わろうとしている昨今、世の母親は今一度この言葉を思い出してみる必要がある。

母は天上で兄と再会し、電報のいきさつを説明したかもしれないが、三十年間の心の重荷は計り知れない。このような悲劇が二度とあってはならない。

「安らかに眠って下さい、過ちは繰り返しませぬから」広島の原爆慰霊碑に刻まれたこの言葉を母や兄にも捧げ、これからも子や孫たちに語り継いで行かなければならないと、母や兄を憶う度に心を新たにするのである。

写真で見る ②
15年戦争と戦後

1932年　陸軍将校らが犬養首相を暗殺（5・15事件）

ここに政党政治は幕を閉じました。

戦争に消えた青春

貝塚南支部　披村益子

昭和十二年七月七日、日支事変に始まり、昭和二〇年まで、悲しい時代でした。

昭和十六年頃には、戦争は負けそうと或一部ではいわれていました。

電気は暗く、地のはてを行く様な毎日でした。今思えばよく、たえて来たなと思います。また八月十五日がめぐってきます。この日は、ある年令以上の人々の脳裏に、その生涯を閉じるまで決して忘れることのできない情景を刻んでいます。戦場の兵士に送る服を縫うたり、アイロンをかけたり、学業を半ばにして行きました。又鍬を持った事もない私等も一生懸命に畑仕事も致しました。母のカスリの着物をほどいてモンペと上着を作り、毎日下駄ばきでの登校でした。着古した布ですから、すぐどこか破れてしまい、下着の替えもままならず、こまりました。こんな話今の若い人には、テレビの「日本昔話」のように聞こえることでしょうね。

八月十六日から、日本は深い暗いイバラの道でした。いたる所でヤミ市が出来て、とても高価でした。ないものはありませんでした。必勝を信じて、腹をすかしつつ働きに働いた、私たちの青春は何でしたのでしょう。今の若い人たちに、少しでもあんな時代のあった事を、知ってほしいと思います。たった一度の青春も、戦争でした。戦争の犠牲で青春を終わらせた人たちのいる事を知ってもらえたらと思います。

私たちは同じ思いで毎年夏に戦争展を見にいっています。

私の戦争体験15集

機械の下にもぐれ

富田林南支部　西野　恵美子

川西航空工場で爆撃を受けて帰って来た私達は、再度松下工場へ学徒動員として行った。

工場から貰ったうわっぱりを着て、左腕に「女子報国隊」と書いた腕章をつけ、機械ばかりの狭い部屋で機関銃の玉を一つ一つ切り離す作業をしていた。寮といっても大きな和室へ全員が入れられ、布団を敷く所が自分の自由な場所であった。二交替制で夜間働いて昼間寝る方になると、太陽の熱気で蒸し暑い上に、誰かが顔を洗いに体を拭きに或は水を飲みにと、常に人の動きがあって仲々眠られず寝不足の日が多かった。風呂がなかったので水で体を拭くだけで、又石鹸が無いので気分の悪いことばかり、今から思えば不潔此の上なしの寮生活であった。

或る日警戒警報を通り越して空襲警報のサイレンが工場内に鳴り響いた。放送も流れているがはっきり聞きとれない。爆音が大きくなった。

「機械の下にもぐれ……。」

それだけ聞きとれたので、機械の間を走り回ってどの機械にもぐろうかとうろうろしていると、耳が潰れそうな爆音、慌てて機械の横にくずれるように坐り窓を見ると飛行機の翼が屋根すれすれに飛んで行った。

「ひゃーっ。」

と思い、体を小さくして機械に縋り付くが、頭も体も機械よりはみ出てもぐれない。これではやられる。何とか体を隠さねばと思うがどうにもならない。床にへばり着くより仕方がない。又すごい爆音。窓の外ではさっきの反対の方向に飛行機が飛んで行くのが見えた。工場の上を飛行機がウロウロしている様で爆音が大きくなったり小さくなったりしている。防空壕にも入らず機械の横で寝ているだけでは、殺されるのを待っているみたいだ。「もう来ないように。」と一生懸命神に祈った。六甲山へ避難した時は体が揺れたが今日は敵機が低く低く飛んで日本人を一人でも多く殺そうとしているのか。今頃機関銃で殺されている人もいるのだろうかと考えると恐ろしくなりひとりでに母を呼んでいた。

どの位機械の横で寝ていただろう。放送で何か言っているようだった。あっちからもこっちからも声が集まって来た。

「見たか、飛行機？」

「見えたよ、アメリカ人の顔。」

「はね、工場の屋根すれすれやったやろ。」

いつしか爆音が消えて敵機が去ったらしい。「助かったんや。ああよかった。」と一人喜んでいた。

この工場には防空壕がなかった。設備の悪いこんな工場に私達を来させるなんて国のやり方に対して腹立たしく悲しかった。働かすことばかりで学徒の命の大切さは頭の中になかったのだろう。

「ここまでやられたら日本も負けやなあ。」

「そんな事言うていいの。」

「そやけど日本の兵隊さん何してるんやろ。」

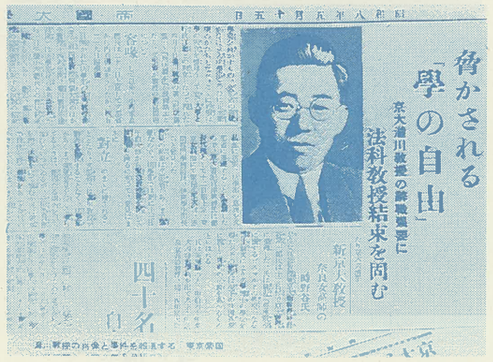
「敵機が日本の国へ入って来てんやでえ。」

「弾がないのかな。こんだけ作ってるのに。」

「日本の国へ入るまで撃たんとあかんのによう撃たんのかな。」

私は皆の言っている事を聞き乍ら、「負けるかも知れん。死ぬんやったら両親達と一緒に死にたい。早く家へ帰らんとあかん。こんな所で死ぬのはいやや。」と思い急に家族の事が心配になった。

父も工場へ働きに行っているので今頃機関銃で撃たれてへんかな。おじいちゃんは田んぼへ行ってるけど大丈夫かなと次々思い出して一刻も早く家へ帰ろうと思った。



写真で見る15年戦争と戦後 3

1933年　滝川事件を報ずる新聞

5月26日　京都大学の滝川教授が休職処分。
この年、日本は、国際連盟を脱退しました。

ひもじさに泣いた学童疎開

曙川支部　田中廣子

戦争体験の話をと云う事なので私が感じた事を綴ってまいります。昭和十九年十月八日国民学校（今の小学校）六年生の時、奈良県吉野山の芳雲館と云う旅館へ学童疎開に行きました。

出発の時は遠足のような気分で出発しました。向こうへ着いた途端そんな気分はふっとんでしまいました。夕食はお丼の中半分位の御飯、惣菜は野菜煮、二切のたくあん。皆さん今の夕食で考えられますか。御飯はお米だけではなく麦、大根が入っているのです。朝は顔の写る様なおかゆ、それもお丼に半分位。皆泣きました。しかし当時は〝ほしがりません。勝つまでは〟の時代です。

冬は大きな部屋に火鉢が一つ、もちろん炬燵もありません。雪が降ると水が少なくなり顔を洗うのも洗面器半分、お風呂も週二回、頭は一回しか洗えないのです。それも頭を洗う時だけ洗面器に十ぱい。今は朝シャンが出来るのです。

六年生位は食べたいさかりです。でもおさつ（さつまいも）二切、それをもらう為には山を一つ越えた所までたきぎを取りに行かねばいただけないのです。それも毎日ではありません。今考えれば雪の中をたった二切のさつまいもをもらうより、じっとしていた方がお腹がすかないのに。子供ですね、食物につられて行くのです。お白湯（さゆ）だけはいただけたので、吉野名物桜の塩漬を買ってお湯の中に入れて飲んではお腹をふくらませていました。茶腹も一刻です。

二十年二月二十日、六年生は進学のために大阪へ帰りました。そして三月十三日夜半、大阪大空襲焼夷弾攻撃。大阪の三分の一位（上六から港町まで見える）燃えました。十四日は卒業式だったのですが、焼け出された方が講堂に避難されており、生徒もちりぢりになっているので、式は中止になりました。テレビ〝君の名は〟を見られた方は御覧になったと思いますが、防空壕が写っていましたね。あの中で多くの人がむし焼きになって亡くなられました。私の友人の乳母さんが、衣類の無い時だったので、防空壕の中でその子の柳行李（衣装箱）を抱き乍らむし焼きになっていました。少し冷えてから取りに行ったら、盗まれていました。せっかく命をかけて守ってくれた衣類なのに。そんな時代だったのです。

六月一日の空襲で多くの人が亡くなられました。昼だったので用事で外出され、外出先で空襲に会われた方で亡くなられた人は、どこの誰とも解らずに一ヶ所に集められ町の中で荼毘（だび）に付され、場所は解りませんが埋葬されました。

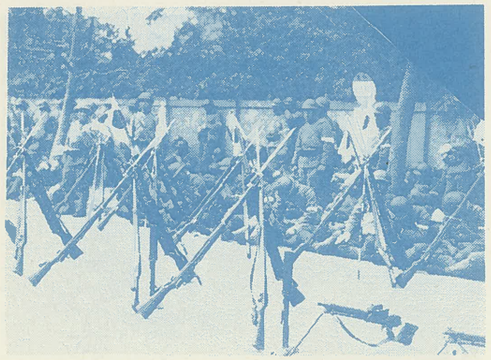
清水谷高校の前の電柱に、馬がつながれたまま鼻から血を出して死んでいました。つながれていなければ何処かへ逃げられたのにと。

防空演習と云ってバケツリレーとか竹竿の先に縄をくくりつけ、それを水につけ壁についた火の粉をはらう練習をしたのです。今から思えば子供の遊びのようです。

大阪市内では学校授業は出来ないので陵南学園（高鷲）へ登校していました。六月七日、大阪の森ノ宮方面が爆弾攻撃を受けました（大きな火事があると雨が降るのです）。その帰途に丁度当たっていたのでしょう、避難している所へ（傘が目じるしになった）機銃掃射を受け、危うく死ぬ所でした。六月十五日、とうとう私の家も空襲で焼けました。手前の家まで消したのですが、次の波状攻撃の為についに火の手が上がりました。消防署の人達が消すのではなく、私の父親とか近くの年のいった男達で消すのです。とても女子供では消せません。戦争はむごいものです。只々手をこまねいて燃え落ちるのを見ているだけです。

この日が晴れていたら原爆を落す予定だったと噂が流れました。もちろん広島に落とされてからですが、今は一発で日本のような小さな国は破壊される核爆弾が出来ているようです。

戦争は幼い子どもを不幸にするだけではなく、国が亡びるのです。平和日本を永続するよう努力したいと思います。



写真で見る④ 15年戦争と戦後

1936年　2・26事件

2月26日、皇道派青年将校がクーデター断行。斎藤内大臣、高橋是清蔵相を殺害。
11月25日には、日独防共協定を調印。

この年になってわかります
出征する人・残る人の悲しみと怒りが

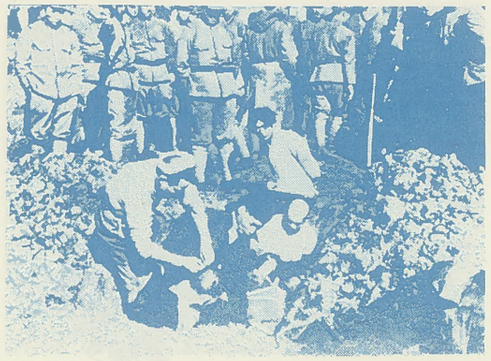
大野芝支部　山本　美恵子

私は、昭和十年生まれです。戦争体験についてと云うことですが、何から書いてよいやら、子供乍らこわい事、悲しい思い出が一杯です。私の生まれた所は、戦闘機がたくさん並んでいる飛行場の近くでした。野戦病院も近くでしたので、父親は飛行場の方の仕事をしていたため、私と母親、弟と三人山奥の方へ疎開をしました。敵の攻撃があると、遠くの山の上からみますと夜空が真赤になり、父親のことを思い、いつも泣いていたそうです。

一

戦場に行く人のことが今も私の身体の中にしっかりときざみ込まれています。母方の叔父が赤紙一枚で、どんな事情が有ってもことわることも出来ず、家業も捨て、家族をおき、元気に出征して行きました。従妹は二才でした。父さんが二度と帰ることのない人になるとは思わず、「父ちゃん、帰るときには赤い自転車買って来てネ」と、父親の大きな手と手を合わせて、「指切りゲンマン」と大きな声で云っていた姿、思い出しても涙が出て来ます。その女の子も二人の母親、長男が六月には結婚されると、四月中頃連絡があり、なんて月日のたつのは早いです。叔父も残念乍ら帰ることのない人になってしまいました。赤い自転車でなく、白い小さな箱だけが帰ってきたのです。

私達の教育は、戦争に行く、又戦死することが手柄のように云われていましたから、叔父は戦って戦死したのだから、偉い人だと納得させられたように思います。でも残念ですが、戦場移動の時に食べ物もなく、水もなく、つらい苦しい中で、栄養不足のため



写真で見る 15年戦争と戦後 ⑤

1937年　南京大虐殺

7月7日、盧溝橋で日中両軍が衝突、日中戦争が開始。12月13日には、日本軍が南京を占領。大虐殺が行われました。（南京事件）

「水がほしい、リンゴが食べたい」と云い乍らなくなったと、戦後、復員された人がたづねて来て下さり聞かされ、子供乍らクヤシクてクヤシクてたまりませんでした。その人も過労がもとで、一年半後になくなられたと悲しい知らせが入って来たのを、おぼえています。

二

父方の従兄は四人いましたが、昭和十六年に一人出征し、二年後に戦死、昭和十七年に長男が出征し、幸か不幸か一年後にフィリピンで、左ももに敵の鉄砲の玉が貫通したため、復員して来ました。弟の戦死したことを知り、とてもつらそうに墓前にお参りしている姿をおぼえています。三男も続いて出征し、敗戦になり何の連絡もなく親類のものが心配していました所へ突然に電報が入り、「マイズルへ、フクイン〇月〇日」と簡単なものでしたが、嬉しい知らせでした。三日後に、従兄妹と一緒に舞鶴港まで迎えに行きました。船から、復員の人達は目はギロギロとやせほそった身体で降りたって来られました。名前を呼び合う泣き叫んでいる人達、捕虜生活が長かったため、どう云う教育が有ったのか、こちらが暖かくむかえに行っても素直に手をにぎれない人もいたようです。この従兄も、私達の近くで住居も建て結婚し一男一女をもうけ、三年半で又々栄養不足による病気が出てなくなってしまいました。こうして何年も戦場や捕虜生活から開放され、人間らしい生活が始まっても、長生きも出来なくたくさんの人が亡くなられたと聞いています。

戦地に行く人はもちろん、出征された後、家業、家族を守って来られた人達は、今私この年になって分ることですが、本当に大変だっただろうと思います。決してこの日本、いいえ、どんな国でも戦争はすべきでないと思います。でも残念乍ら、ニュースなど戦争の放送を聞くたびに胸が痛みます。私達が今、皆で戦争のおそろしさを訴えて行くべきだと思います。一寸したきっかけで、こうして戦争体験記をと連絡いただき、書いてみる決心をして身内の死について書きましたが、他に防空壕の中のこわさ他色々有ります。どんなことを書いても、書きつくせません。戦争は、絶対だめです。どんな国でも戦争はやめて……おねがいです。

死ぬはずだった、その日

千代田楠支部　湯浅都志恵

昭和二十年八月四日、広島陸軍病院三滝分院に勤務していた私は、山口陸軍病院に出張し、五日夜遅く鷹匠町の宿舎に戻った。

八月六日、午前八時一五分頃、三滝分院八号病棟被服室の入口の扉のノブに手をかけた時、背後から患者の傷病兵に声をかけられた。

声の方に振り向いたその時である。私は、巨大な稲妻の塊の中に投げ込まれた、と思った。

どれだけ時間が経過したか判らないが、何かが頭の上に被さっている。「何だろう?」私はハッと気がついた。平素の訓練どおり、両手を広げて目と耳を被っている。その指先に血液の感触がする。

「怪我?なぜ?暗い?」「ああ、目は見える。」顔にかぶさっている髪の毛が邪魔だ。(当時、肩先より少し長い髪を左右、三つ編みにし、先端をゴム紐でくくり、前頭部で交差させて、一〇本位のピン止めで地肌に止めていた。)

誰も居ない。「なぜ?　患者は?　早くみんなの所に行かなくては……。」

体の上の物をなんとか取り除いて、やっとのことで立ち上がって驚いた。どうも屋根瓦の上に立っているようだ。屋内の廊下にいたのに……。

見廻してみると、病棟はペシャンコに崩れ落ちている。ねじ曲っている所で婦長殿が叫んでいる。「病床日誌を出して!!」と聞えてきた。その声で私は初めて「ああ爆撃されたのだ」と思った。婦長殿の髪もザンバラになっている。私と同じ髪型だったのに……。

「みんなはどうしたのだろう?」私はやっと裏庭に出ることができた。

写真で見る 6
15年戦争と戦後

1938年5月　支那事変で中国へ向かう従軍看護婦

4月1日、国家総動員法が公布。
「戦時(戦時ニ準ズベキ事変ノ場合ヲ含ム)ニ際シ、国防目的達成ノタメ、国ノ全力ヲ最モ有効ニ発揮セシムルヨウ人的及ビ物的資源ヲ統制運用スル」(第1条)

今、目の前で過去に経験のないことが起こっていた。しかし爆撃だと思った時から五感の働きが止まったのか、私はこわいとも恐ろしいとも感じなかった。私は鼻梁と顎の裂創のほか体に一〇ヶ所ほどの切傷にガラス破片がくい込んでいたが、その時は気がつかなかった。出血が血餅となって傷口を蓋し、自然に止血していたようだ。

雨が降ってきた。「黒い雨だった」と後で聞いたが、私には記憶がない。半壊の病棟へ雨を避けた。同僚の誰れかが「顎の傷、大変よ」と腰に巻いていた三角巾で顎を縛ってくれた。一般人の負傷者ぞくぞくとくる。救護!!薬品なし、材料なし、只、水を呑ませるだけ。何時間経っていたのか……偶然にも私は左腕に着けていたはずの時計を廊下跡で見つけた。応召時に祖父が贈ってくれたものである。(爆風で腕時計まで吹っとんでいたのだ。)夕方、巡回して来た軍医殿が私の顔を見て、「早くテントへ来い。親泣かせの顔になるぞ」と言って臨時手術室テントの場所を教えてくれた。テントの廻りは負傷者であふれていた。そして皆、ひどい。私なんか傷のうちに入らない。

私の手当は翌日の午後になって、鼻梁を二針、顎も八針縫合してもらった。「化膿しなければよいが……」と言われた。

夜になって乾パンが配られた。幼年学校生の患者たちと裏山に行き、病棟から引っ張り出してきた蚊張を松の枝に吊って眠ることにした。

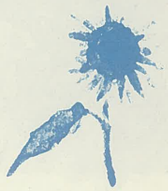
広島は燃えていた。

八月六日――私はその日に死ぬはずであった。その前夜、私は、出張から帰広したのだから、六日朝は、まず本院(基町)に行って庶務に帰院の申告をし、被服送状を被服庫へ渡す仕事が課せられていた。しかし二日間の留守で受持患者のことが気になっていたし、この暑さで本院まで歩いて行くのは辛いなあとも思っていた。

出勤のため宿舎前に整列した時、私は先頭の婦長殿に「本院行きは午後にしてはいけませんか。」と言ってみた。

まさか許されるとは思っていなかった。が婦長殿は許可してくれた。当時の状況では、許されることではないのに。本院は爆心地に近く、しかも広い。爆死か、焼死か、生き残れる可能性は万に一つもないであろう。

八月六日偶然か、不思議な婦長殿の許可で無残な多くの人たちを見た私はその中に入



らず命びろいをした。私の戦争体験は戦後も続いた。

昭和二一年一月、二二才の誕生日を迎えた数日後、私たちの乗った復員病院船、有馬山丸は、ブーゲンビル島に向った。第二次航海は、ラバウルで、この二航海共に多く復員傷病兵がなくなられた。そのほとんどは栄養失調症であった。四月十六日、下船した浦賀で待っていたのは〝コレラ〟。コレラに罹患した当時の広東からの復員兵の看護であった。

助産婦、広島の火葬、病院船の水葬、浦賀のコレラ看護、人の世の生と死、いろいろとありました。〝合掌〟

（元・日本赤十字社第一〇六救護班要員臨時救護看護婦）

写真で見る 7
15年戦争と戦後

1940年　白金を供出する女優さんたち

9月22日、日独伊三国同盟成立。10月21日には大政翼賛会が発足。政党が解散しました。

二度目の死亡通知書

西陶器支部　若林　のり子

一通の封書が届いた。

「何だろう」差し出し人は大阪府福祉部社会管理係となっている。

謹啓

終戦から早くも半世紀に近い月日が経過しましたが……右のとおり（文中では左記になりましたが）お知らせ致します。この「お知らせ」について他のご遺族の皆様へもお伝えいただければ幸いです。

埋葬地、チチンスク地方第五十二収容所第三支部ゴーレク村

氏名　ヤタケト（タ）ミカ

生年及び階級　明治四十四年生　兵

死亡年月日　昭和二十一年一月八日

平成四年九月三十日

「アァー」誰もいない部屋で思わず意味のない声を発したが頭の中は真白になっているのが自分でわかる。ややあって「他の遺族の皆様へもお伝え下さい」の文字が頭の中に浮かび、冗談ではない他の遺族の皆様なんて一体半世紀も過ぎた今誰が生き残っているのか、誰に知らせと云うのだ、矢竹富吉（ヤタケトミキチ）を知っていた母は亡く、伯父、叔母も亡くなった今、一体誰に知らすのだ、誰に〳〵〳〵。

父は昭和二十一年一月十五日シベリアチタ州ゴーリカ収容所にて死亡を聞かされているだけです。今更チチンスク地方……だと紙きれ一枚でお知らせ戴いて何んだと云うんだ、戸籍でも過去帳でも一月十五日没なんだ、四十数年のその記憶をどうしろと云うの

か、誰に知らせるのだ、誰に〈〈〈〈。

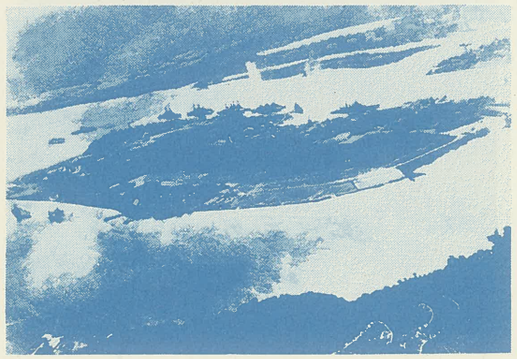
混乱した中で、とり合えず母の仏壇の前にそのお知らせを供え、母と話した。

――お母ちゃん、私等はお父ちゃんは死んだと聞かされていただけで、死んだのを目の前で見た事もないのに二回も死亡通知書を受取ってしもうたで。お母ちゃん覚えてるか。灯火管制の薄暗い部屋の中で、肩コリ症のお母ちゃんの肩を叩き乍ら五分も叩いてへんかったかも知れへんのに「もうお父ちゃんのおる満州迄着く位叩いたか」と私が聞いたら、「お父ちゃんのおる満州迄はもうちょっと叩かな着かへんなァ」と云われて、お父ちゃんのおる満州へ着く迄叩きたさにだるい手を我慢して続きを叩き、「もう着いたか」「そうやなぁ、お父ちゃんのいる満州は寒い寒いとこで南国で育ったお父ちゃんにはつらいやろうなぁ。」――私は何故かこの会話を今だに昨日の事の様に思われ度々思い出す。そしてこの肩叩きの時間は、父が満州から更に遠いシベリアに渡ったと云う知らせでシベリア迄の距離に延長された。父が出征したのは昭和十九年と聞かされているので当時私は五才位であったろうに、今思い返せば戦時下に残された家族は何んとしっかりとしていた事かと思う。

メガホンを持った町内のおじさんの空襲警報発令の声を聞けば、夜半であっても家の裏口から畑道を（当時大阪の住吉辺りではそんな所もあった）泣きもせずに貴重品を背中にくくりつけられて防空壕に走り、暗い防空壕の中で敵機のうなる音におびえながら空襲警報解除のおじちゃんの声を待っていた。そんな私に母はよく「お父ちゃんが帰って来たらのり子は偉かったとほめてもうたるからな」と云ってくれるのが嬉しくてワラぞうりをはいて背中に貴重品を背負って走っていた。

父の戦病死の公報が入ったのは昭和二十三年頃だったと思うが、死んだと聞かされているに過ぎない家族にとってそれはあく迄も聞かされているだけで現実ではないのです。

母娘二人だけの貧しく淋しい寝床の中で、風が玄関の戸をカタカタとゆすって行く音に、「お父ちゃんが帰って来たのと違うか」と、母娘で玄関迄飛び出して行き苦笑した事が何度あったか。又、当時掲載されていた引揚者名簿の中に、矢竹〇〇（〇〇は忘れてしまいました）と余りにも珍しい姓なので新聞社に問い合わせましたが、戦後の混乱期で新聞社でも詳しい事は解らないとの事だった。



写真で見る 8
15年戦争と戦後

1941年　太平洋戦争

12月８日、日本軍は、ハワイ真珠湾を攻撃、マレー上陸、太平洋戦争が始まりました。

ご遺族の皆様云々……と云いますがその家族はどんな生き方をしたと思いますか。今の様に女性の職場が溢れていた訳ではなし、まして国は福祉等と云うものは敗戦の復興で見むきもしなかった。足の悪い子供をかかえ、その子の治療中に夫を戦地に送り、戦時下に女一人で子供の治療を続けるのは無理と云う事で夫の帰りを待ち続けた母は、待つ事を余儀なく断念させられ、それからの四年間私を阪大病院に入退院させ乍ら、そこそこの教育も受けて育った人であり乍ら近くの町工場でやっと女工の職を得て働き続け、私が十九才の時に、無理が続き脳溢血で倒れ、それから三年間娘盛りの私の世話になるのがつらくどんなに苦しんだでしょうか。「こんな役立たずの、子供に苦労をかける親は早く死ねるといいのに。お父ちゃんさえ生きていてくれればこんな苦労はさせずに済んだのに。」そんな母のグチに耳にたこが出来たし、そんな事を云って貰ったとて私の苦労は無くならへんと悪口をののしり最後は何時も、お父ちゃんがもしどこかで元気でいて帰って来たら、あれも話そうこれも話そうと何時しか親子三人の語らいを空想し、我に返って元気になって二人でシベリアへ確かめに行こうね、と落着くのだった。

何故に半世紀も過ぎた今になって、二度もの死亡通知書を受取らなければならないのですか。二十数年程前にも叙勲通知を受け、何が今更叙勲だと腹立たしく思い散々放って置いたら、戦後処理が出来ませんのでと云う通知を再三受取り、主人になだめられ勲章と盃を受取りに行き大変腹が立った。そちらはそれで処理済かも知れないがこちらはあく迄死んだと聞かされているだけなんだと。二度目の死亡通知書の文面にもあった、遺族調査が終了いたしましたと、何度死亡通知書を受取ろうと残された家族には、死んだと聞かされているだけで終了等するものではない。その都度母の苦労を思い、娘で喪主を務めた悔しさを思い返すだけである。

再度仏壇の母に、「お母ちゃん、そのうちにお金を貯めてきっとシベリアへ行って来たるからな。お墓も何んとか建てたる。それともお母ちゃんはそちらでお父ちゃんと生活してて取り残されているのは私の方かな。最も私には主人も居れば三人の息子や娘も居るけれど。」

それでも父のいる家庭で娘として暮らしたい思いを消す事が出来ない。それが出来なかった淋しさは、末娘が二十三才になっている母親である今もどうする事も出来ない。

戦争により残された家族の一人の思いです。そして私の生きている限りその思いは残り、戦争と云うものへの悔しさは残るのです。

戦時下の教員生活を通して

鴻池支部　梅居　操

早く両親と死別し、十五才頃から家事一切を切盛して、然も二人の弟妹が病没するなどで多忙な身だった。三十才近くの晩婚だったがこれで幸福になれると思ったのも束の間、召集令で生木をさくように、夫は出征して中支で戦死をした。子供がないために独居生活五十三年目となった。金鵄勲章を下賜されたものの、紙屑同然の反古紙だった。敗戦を知った時、あなたの死は犬死も同然と、机をたたいて泣き伏した。教職員の資格で一人生き抜く決心をした。

昭和十八、十九年は、戦い利あらずの厳しい時代。職場での張りつめた全職員の姿、子供を護る事が唯一の責務だった。校長は御真影のもりであった。始業に取りかかると空襲警報。いそいで子供を枝下の各地区へ、それぞれの地域担当者が引率する。帰校しようにも艦載機が頭上で機銃掃射をしている。道端の建物木陰に身をかくして逃げ帰った。

中河内郡盾津町立の小学校は三校あって、私の勤務校は大規模校で生徒も多かった。木造校舎の半分は、被服省の軍袴の材料と米俵でいっぱいだった。従って教室が不足して、午前と午後とわけて二部授業をした。当時は高等科もあって、午前中に授業をして、午後昼食後女生徒を連れて、縫製工場へ軍袴の仕立てのミシン掛け、一定の与えられた枚数をしなければならず、生徒も一心だった。受持ちの授業はせねばならず、相当の過労であった。戦時中は自己の勝手で休むことも許されない。戦死者や他国で戦争している人の事を思う時、勝手気ままは許されない。月月火水木金金で日曜でも出勤をした。滅私奉公の一点張りだ。また大阪市立大宝小学校の疎開児童の受入れもあって、教室が不足で盾津飛行場の官舎を借りたこともあった。神社清掃も児童の仕事で始業前に高学年の指揮の下に低学年もよく働いた。師弟倶行で教師も共にで遠距離の職員は苦労した。片町線が単線で京橋まで三十分近くかかった時代だ。

終戦になって事情も目まぐるしく変化をした。進駐軍の資格審査も厳しく、教育のありかたも、すっかり変わって新教育研究会に出張した。

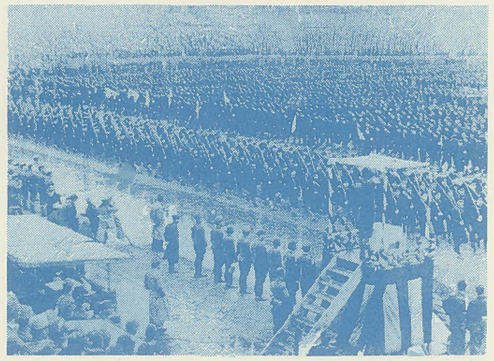
終戦後初めての給与に、四千円を受取った事は忘れない。それまでは六十円から七十円までの間だった。

戦後第一回の給食に、皿に馬鈴薯のゆでたのが一個、児童と共に感謝して食した。私は現代の教員は、担任事務外の分掌は少ないと思う。当時は事務職員も、養護教諭もなかった。事務分掌として担当したものだ。給与係りも十年近くもした。授業を終って書類を作り、郡の役所の点検を受ける。年末は書類の作製が複雑で、年末調整と給与も多額だ。夕方五時近くに説明会に出向して、翌日に持っていく。いやでも夜間仕事だ。訂正もなく通過した時は七時頃に帰宅するが、訂正箇所があったら後まわしになるので九時頃になる。

物質の不足も甚大で、児童六十五人の学級に、配給靴六足だった。平等に分配を原則として、出席簿の一番から配給をした。買いたくても手に入らない。教室の清掃時、鉛筆ゴム消し定規など一定の箱にいれさせ、ない子にあげた。校庭の落し物も必ず届けさせて、朝礼時に知らせると共に名前を書くことを指導する「落し物の先生」といわれた。

戦争を体験した者には物をすてる事が出来ない性分となった。食料品に年月日が記入されているが、それは一応の目安で、すぎてもいたんでなければ食せると新聞にも書いてあり捨てることを非難してあった。今はそれでよいかも知れないが、これからの世の中はいつまでもこの状態が続くとはいい切れない。

負けて一番よかったのは、医学の進歩であろう。以前は快復のむつかしい病気も快復する時代となった。私達退職女教員の、全国連合体、退婦教のスローガンは「教え児を戦場に送るな」である。



写真で見る 9
15年戦争と戦後

1943年　学徒出陣（神宮競技場）

学生、生徒の徴兵猶予が廃止。また兵役年限が40歳から45歳へと延長されました。

勝つまではとがんばった田仕事に工場の作業に

小阪支部　伏谷良子

戦争体験といいましても、私は京都に生まれ京都に住んでいましたので、東京や大阪の様に爆弾が落ちて来た等の経験はございません。ので戦時中にどんな生活をし学生時代をどうして過ごしたかをかかして頂きます。

私の家は昭和十三年の終り位から小さな食堂をして居りました。食堂といっても甘党を夏場売って冬はうどん、丼等を売っていました。戦争もだんだんはげしくなって売る物もなく、サトウ、お米等配給になりました。それでお客様に売るものはなくなりました。他の食堂もそうだったと思います。私の所も配給のお米から一升をいろいろな野菜を入れ雑すいを作り、お客様一人に一ぱいづつ売るのです。父が少しでもおいしくと思いカレー粉を入れて、いい味つけをしていました。昼食の時間に売るので、家の外は大勢の人でいっぱい並んでいました。私が学校の休み時は食券を一枚づつ配りました。たしか百枚近くあったと思います。店の中は全部入れないので、長い間並んでいる人もありました。丼茶わん一ぱいの雑すいではお腹は一ぱいにならないので私とこから又他の店へと走っている人もいました。これも毎日は続きません。お米がなくなれば店はお休みです。又次の配給が入ったら売る事が出来ました。

私は女学校に入って一年半程勉強をしたでしょうか、二年生位から体育の時間に鴨川に行き大根やさつま芋等作っていました。畠を耕したり水をやったり、お芋等出来たのを学校に持って帰り大根や菜っぱで昼食にお汁を作って各クラスでたべました。今の小学校の給食みたいでその時はとてもおいしく思いました。

今度は三年生の人達と向町の百姓さんの家にも手伝いに行く事になり、家から電車に

写真で見る⑩
15年戦争と戦後

防空演習体操をする婦人や子供たち（神宮競技場で）

のり百姓さんの家に、服そうは上下もんぺ、胸に大きな名札をつけ防空ずきんとかばんをさげて土、日曜をのぞき毎日行きました。今までした事もない仕事です。たんぼの草ぬき、くわで土おこし、おじさんに教えてもらい牛も引っぱりました。とても田んぼに足を入れるのがいやでした。田んぼの中のたにしが取れあまりたくさん取れたので家に持って帰り食べた事を思い出します。なにもかも始めての経験で家に帰って父や母に一日やった事を楽しく話したのを今思い出しています。

戦争もますますはげしくたべるものもなくなって来ました。昭和十九年になり私達はこんどは、京都の南のはしにある三菱重工に動員に行く様になり工場の場所を教えてもらい満員電車にのり毎日通いました。ある日電車の中で時計を取られました。大人達の間におしはさまり取られても声も出せません。女学校へ入る時父に買ってもらった時計なのでとても悲しいでしたが仕方がありません。工場へは朝八時までに入らないと遅刻になるので時計がなくなり困りました。

私達工場では飛行機の部分品だときいてます。銅板にニコロム線をまいていくのです。友達二人でくんで仕事をし一人はニコロム線まき、一人はその先にハンダ付けをするのです。毎日毎日朝八時から四時までやりました。日本が勝つまではと私達は一生懸命やりました。工場に通って約一年程して先生が私達の所に来て「皆表に出て来なさい」というので工場に行かない時は近所のおばさん達と千人針をやりました。

仕事をやめ全員広場に集まりました。先生が「これから天皇陛下のお言葉がございますので、皆、ちゃんと聞く様に」という事でした。何事かと私達はいそいそ話をしてお言葉をしずかにききましたが、あまりはっきりはきこえませんでした。

あとで先生から、日本は敗けました、だから明日からは又学校の方に行く様という事です。あんなに一生懸命仕事をしたのに、とかなしくなり泣けました。

今は本当に平和で自分のほしいものはなんでもお金をだせば買える。

たべたいものはなんでもある。

私達はお金があっても物はありません。買えませんでした。

戦争はいやです。二度とおこらない事を願います。いつまでも平和であります様に……。

動乱の時代だった
私の幼・少・青年期

春日丘支部　下川秋雄

私は大正八年生まれですから、今年七十三歳になります。生まれる前年のシベリア出兵・米騒動に始まって、関東大震災・治安維持法の公布・金融恐慌・満州事変勃発・上海事件・五・一五事件・国際連盟脱退・二・二六事件そして盧溝橋事件から突入していった日中戦争…とまさに動乱の時代に生を受け、幼・少・青年期を過ごしたのです。いわゆる軍国教育を、骨の髄までたたき込まれた世代なのです。男子としてお国のため、天皇陛下の御ために死ぬることを本懐として、死に場所を得るために人となりとなったようなものです。今の若い人には決して理解してもらえないでしょう。

徴兵検査に合格して召集を受け、フィリピンへ行っていましたが、ほんの僅かな期間で昭和十七年の四月に帰国しましたから、戦闘の場面に遭遇することもなく、銃弾の一発も撃つこともなかったのです。あの動乱の時代を生きた日本人として、命の危機に瀕したことがなかったというのは、幸運以外の何ものでもありません。そんな私の少しばかりの戦争体験をお話してみましょう。

私の生家は大阪市住吉区、住吉神社の近所にありました。九人兄弟の八番目、六男として、それは賑やかな家庭に育ちました。

昭和十六年四月一日、馬場町にあった第二十三部隊に入隊しました。その当時、家には父母も健在、長男は兵役の二年満期で平壌から帰ってきていました。三男はフィリピンへ出征していました。（この兄は昭和十七年末に戦死しました）。

入隊して三ヶ月間和泉の信田山練兵場で訓練を受け、八月末大阪港から中支に向かいました。大きな貨物船に、第四師団の補充要員として、初年兵ばかりが一万名ほども乗っていました。当時戦時体制にはなっていませんが、戦雲急というのか、日本を取り巻く世界の状況は不穏でしたから、生きて故国の土は踏めないかもしれないという危惧を誰もが感じていました。上海に着いた時には一等兵になっていたのではないかと思いますが…。その上海から武漢まで二昼夜の汽車の旅です。勿論汽車といっても貨車ですが、ゆけどもゆけども同じ風景がつづく大中国の平野をただ走りに走りました。その武漢では百五十人位で編成されている矢野中隊の一員として、軍事訓練をしながら待機しました。

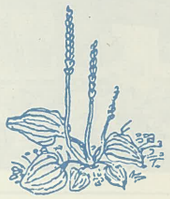
そして昭和十六年の十月、第四師団は全部隊上海に集結し、フィリピンに向け出港しました。年が明けてリンガエンという海岸に上陸し、そこからマニラまで中隊ごとに夜間に行軍しました。いや最終行程は菊水部隊（自動車部隊）の車に乗ったのでした。その頃に日本軍による真珠湾奇襲・第二次世界大戦への突入の報を聞きました。私達は全員「くるべきものがきた！」と興奮したことを覚えています。バタン島という所に落ち着いたのですが、そこで中隊長以下全員が次々にマラリアにかかったのです。四十度の高熱が続き、全く死ぬ思いの何週間かを過ごしました。体力に自信がありましたし、実際マラリアで死ぬことはありませんでしたが……その後コレヒドル島という小さな島に上陸し、六月に第四師団に帰国命令が出て、全員無事大阪港に帰ることができました。最終階級兵長下士適任でした。結局干戈を交えたということも、住民に被害を及ぼしたということも全くありませんでした。食糧も本土から運んできましたし、現地調達ということはありませんでした。ただ住民がさとうきびの汁で作った黒砂糖を私達に売りにくるので、日本製の煙草『誉れ』で物物交換をしました。私達は皆、甘いものに極端に飢えていたので、楽しみでしたね。

帰国後、第二三部隊は再度召集を受けましたが、私はただひとり、教育係として初年兵の教育に携わることになりました。しかしあのマラリヤの菌は頑固で、三ヶ月おいて二度入院し、やっと完治したのです。その病院は堺市の金岡にあって、多分、現在の国立療養所近畿中央病院ではないかと思うのですが、まちがっているかもしれません。

教育係は十九年十二月、満期除隊になるまで務めました。その少し前に結婚しやはり住吉区に住み、召集前の勤務先にもどって一市民の生活をしていました。二十年の三月

写真で見る⑪
15年戦争と戦後

1943年9月　上野動物園の人気者の象「トンキー」も戦争の犠牲に。



の大阪大空襲の際、我が家の裏庭に焼夷弾が突き刺さり、くすぼっているのをだき抱えて裏の畑に放り投げたことがありました。その時は夢中でしたが、あんなことがよくできたものだと、自分でも驚いたものです。

昨今、PKO派遣の合法化を目的に、憲法改訂の必要ありという声がきかれます。世界に誇る『平和憲法』を改悪するなんてとんでもありません。大きな被害と引き換えに獲得した人類が持ち得る最上の財産です。日本国民を戦争に駆り立てた軍国教育が、どんなに愚かで恐ろしいものかを、私達の年代の者は身をもって知っています。平和の尊さを骨身にしみて知っています。私達の味わったあの暗い半生を、可愛い孫達に二度と経験させたくありません。

（聞き書き）

大八車に乗って

富田林東支部　吉岡房子

「あっ！兄ちゃんの顔、まっ黒けや！」「そう言う房ちゃんの顔も、まっ黒けやで」と笑いながら話している母の顔も、隣りの座席に座っている祖母の顔も、トンネルを抜けた時に汽車の煤で、まっ黒になっていた。

学童疎開か縁故疎開かと迷っていた祖母が、子供達（兄九才、私七才）だけで疎開さす学童疎開には踏み切れず、初めは学童疎開児として校庭に並んでいた兄を、無理矢理、引っ張る様にして祖母が家に連れ帰ったと、後に兄から聞かされた。それから間もなく、祖父の実家である滋賀県へ、祖母と私と兄が疎開することになった。（昭和二十年三月も末のことである。）

写真で見る 15年戦争と戦後 ⑫

疎開する学童（上野駅で）

戦局の悪化にともない大都市の国民学校初等課児童を個人的、または集団的に疎開させました。父母と別れて暮らす淋しさや空腹。戦争は子供たちをも大きく犠牲にしました。

煤だらけの顔をしながら、草津の駅に着き改札を出ると、大きな大八車を引っ張っている女の人が立っていた。父の従兄弟の嫁、お文さんだった。私は初対面であったが、何か親しみの持てるおばさんだった。私達の手に持っている荷物を取って、さっさと大八車に乗せて、「正ちゃんも、房ちゃんも大八車に乗り！疲れてるやろ！」と私の手を取り、急いで乗せてくれた。母と祖母は、お文さんと久し振りにあった懐かしさからか、楽しそうに話ながら、大八車の後を押しながら歩いていた。大八車に乗った私は、ガタガタの道にゆられ何度も落ちそうになり乍ら、大八車にしがみついていた。草津の競馬場の土堤を通り越し、春の草花がそろそろ芽を出し始め、三月も間もなく過ぎようとする、春浅い日の夕方、三里程の道程を滋賀県栗太郡宇野尻へと急いだ。父は召集を受けて舞鶴に行ってしまっていたので、見送りがてら滋賀県迄、一緒に来た母と私達兄妹、祖母が揃って大阪へ帰れる日はいつになるのか。それぞれの当時の想いは今だに解らない。が、まさか、この四人の内の一人が、終戦後、二度と大阪の土が踏めないことになるとは、その時誰も想像しなかっただろう！。

「この子等、大阪から疎開して来たんよ。仲ようしてやってね」と云いながら、集団登校する為に集まっている子供達に、いつのまに用意していたのか、男の子には、紙飛行機を、女の子には、千代紙を母は手渡していた。戦時中の物のない時分の事である。どうして手に入れる事が出来たのか。その後、聞き正す事は二度と出来なかったが……。昭和二十年四月滋賀県栗太郡大宝国民学校へ、私と兄が、大阪から疎開の為、祖父の実家のある滋賀県へ転校して来た時の事である。

「加藤の本家の所に来た子やろ。越して来た日から知っとるわ」母からもらった紙飛行機を飛ばしながら、最初に話しかけてくれたのが、一番ごんたそうな加藤武と云う男の子だった。（その子も祖父の親戚筋にあたり、その村の三分の一は、加藤の姓である。）それから後も何かにつけて話しかけてくれるのだが、何か私の気にさわる様な事を云っては、からかってばかりいた。本当はきっと、気持ちのやさしい子だったのかも知れないが。

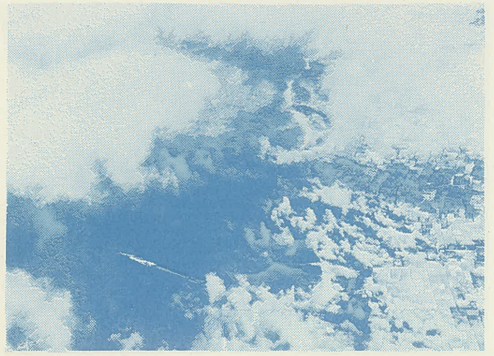
私達が疎開してきた野尻の村から、学校迄の一里程の道程は、見わたす限り田んぼで、あぜ道には、れんげ草が咲き乱れていた。道中、れんげ草を摘んで、それを輪にして、

私の首に掛けてくれたのが、春枝という色は黒いが可愛い女の子だった。春枝さんとは、その後、大阪へ帰る迄ずっと、仲良くしてもらった。

トンネルをぬけると、うっそうと茂った竹やぶの前に出た。ちょうどその前が、大宝国民学校の校門であった。

二年生の私は、三谷とよ子先生に紹介された。今思い出せば、原節子似の若いすてきな先生で、母と別れて暮らす淋しさをまぎらす為か、その先生にとてもなつき、又先生もとても可愛がってくださった。疎開児という違和感も感じず、のびのびと皆に解け込んでいけたのは、祖父の故郷という事で、村の人達に親切にして貰ったおかげだと思っている。疎開者は他所者という目で見られるとよくいわれるが、私達の場合は少しもそんな目で見られていなかったような気がする。

本家の叔父、叔母、又従兄弟達も、私達兄妹、祖母を本当の家族の様に、やさしく見守っていてくれた。その分母が、時々大阪から牛肉を買い込んで来て、本家に持っていっているのを見て、子供心に母の気持ちが解るような気がした。今思えば、物のなかった戦時中、どうして肉など手に入れる事が出来たのか、不思議に思うが、結構当時でも、余り食べ物に不自由したという記憶はない。お米は本家から充分分けてもらい、副食物は母が大阪からせっせっと運んでくれていた。今でこそ、大阪から滋賀県といえば、そんなに遠くは思わないが、当時の乗物では、ずい分疲れた事であろう。その疲れが、後に大変な事になろうとは、その時は誰も気付く者はいなかったのであるが……。



写真で見る 15年戦争と戦後 13

1945年　沖縄戦

４月１日、唯一の本土戦となった沖縄。住民約15万人が戦争の犠牲となりました。

戦争の犠牲者はいつも女と子ども達

奄美大島 名瀬市　南　トシ子
（旧制泉佐野高等女学校卒業生）

昭和十八年敗戦の色が濃くなって、本土もあぶないと言う時の三月。卒業と同時に島に帰り、青年団員として、食糧増産サツマ芋の植付け、荒地の開墾と、月二回の出征兵士の武運長久と神社参り、まあまあおだやかな日々でしたが、喜界島には軍の飛行場があり、その整備のため住民が駆り出されました。出来上らないうちから赤トンボと呼ばれるのが来るようになり、又、乗組んでいる人達も十五、六才のまだ童顔の少年達でした。その夜は御馳走でおもてなしをし、しばらくは、そのようなことがつづきました。

十九年になると疎開の話が出て、女子供はなるべく内地へとのこと、島は廻りが九里、戦争が長引けば、食糧不足は目にみえています。それまでも食糧は鹿児島から来る状態でしたので…。何度も何度も部落の常会がつづき、私の家では七人の女の後に長男が出来たので、又八十才近い祖母も居り女子供では、もし戦場にでもなれば邪魔になるだけとの母の決意で疎開と決めました。ある朝陸軍の兵隊が上陸して来ました。いよいよ戦局が近づいたなあと感じられました。とてもつかれた様子で彼方此方にすわりこんでいました。わが家に水を貰いに来た兵士にサツマ芋とヤギ肉の炊いたのを出すと、自分は食べないで包むのを見て、たづねると、上官の為とのことで余分に入れてもたしたとのこと、胸をうたれるものがあったと母は話して居りました。後で、学用品をお礼にと持って来たと話していました。七月になって本決りとなり、八月に第一陣としてただ身の廻りの品だけを持って、戸締りもせず、旅に出るような気持で、家を出ました。一度、古仁屋の軍港へ集結とのことで、基地で、二十日間位、共同生活をしていました。鹿児島まで軍の護衛艦に守られて、九月はじめに鹿児島へ着きました。後では、米軍の潜水艦にやられて亡くなる者、又、体と荷物が別々の為助かっても荷物がなくて困る人達も出て、十九年の終り頃には、沖縄からの学童疎開の対馬丸遭難事故など……。疎開も取り

止めになっていました。艦の中で、弟が百日を迎えたのが昨日のよう、又夢のように思われます。

しばらくは鹿児島にいたのですが、ここも疎開の話が出て、又も同じ県内の川内に行くことになりました。十一月頃でしたが、その時は、東京からの疎開者も増えて、丁度、石炭工場があり、皆其所で、働くことが出来、現金収入もあって、お金さえあれば米や卵も買える、まだ少し平和な時でしたが、出水の航空基地がやられ、又、コシキ島の艦砲射撃を受けるかもしれないと、もうその時には、十月十日の空襲で、喜界島も名瀬も古仁屋も空襲されていました。転入の手続、学校の手続をすませてヤレヤレと思えば、又、移動です。今度は大口市、熊本県との県境です。鹿児島の北海道と云われる所です。学校へも五km、駅にも五km、町には六kmという山の中です。妹達ははじめて雪をみました。青年団の奉仕作業にもよく出ました。特に田舎は封建的の強い所で他者として差別を受けたこともありますが、家主がとてもいい人で、母や次の妹は畑や田圃の植付けから刈入れまでの手伝い、私は和裁をして生活もやっと落着き、空襲があっても心配のない状況にありましたが、そのうち、ソ連と宣戦布告とのことで、それから防空壕を私の家は此所から親戚の人は向うからと山腹をUの字型に掘りすすめて、明日は貫通するという日が八月十五日でした。その時の虚脱感、ホッとしたのか、今までのことが頭の中をかけめぐり、多くの犠牲者を出した、このたたかいは何の為の戦争であったのか、戦死した人達への思いがこみあげてきました。

二十年の暮には、これが最後の大島への引揚船とのことで、少しばかりの財産があり、又祖母も帰りたがっているので、帰ることになりました。三十度線で米軍の統治権となり、二八年十二月のクリスマスプレゼントとして祖国復帰するまでは、沖縄で生活をしていましたが、沖縄では、黒人の子供、アメリカの子供、いやおうなしにアメリカの兵隊に暴行を受けて出来た子供達を見ました。今、自分が子供を持ってはじめてその時の母親の如何ような気持で日々を過ごしていたか、何時までも、死ぬまで、尾を引くかなしい出来事です。

本当に、戦争の犠牲者は女子供達です。二度と戦争を繰り返すまい、今の平和な日々を、日本だけでなく世界中が平和であるよう、強く世界平和を願ってやみません。

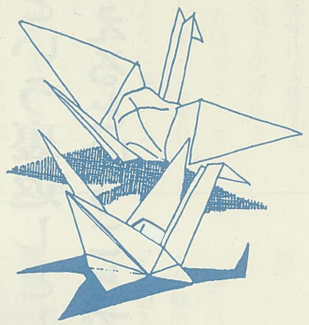
写真で見る 14
15年戦争と戦後

1945年　8月6日ヒロシマ

8月6日広島。9日長崎に原子爆弾投下。
人類がはじめて体験した地獄の世界。今なお被爆者の苦しみは続いています。

俳句

鶴を折る

狭山南支部　佐古澄江

「折り鶴」を手話もて唄う冬まどかに
花盛り歌えるものが軍歌とは
花の奥　軍装の影うごめきぬ
「君が代」が児の列へ来る花の冷え
自衛隊往きのバスです　楓の実
闇へ咲くアカシヤ密に反戦歌
アサガオが喋り始める記憶の戦さ
指導要領元帥が出て　八月来る
ケロイドの一つずつ現れ原爆忌
いくさ知らぬ指が鶴生む原爆忌